

ここまで反対されると、臨也を援護したくなるのはなぜだろう。自分は天の邪鬼気質だっただろうか。

「優しいとかが全部演技ってわかってますし、バイト代が本当にいいんです。食費も浮きますし、僕もそうやって利用してるわけですからお互い様というか」

騙されていいなし、騙される心配もないし、自分は臨也に恋していいなし、嘘で演技だとわかってるから傷つくこともないのだ、と繰り返して告げて大丈夫だと断言する。

「臨也さんのごっこ遊びにつきあうバイトなんです。それだけです」

「それが臨也じゃねえなら俺だって反対しねえ。推奨はしねえけどな」

相手が臨也と言うだけで、静雄にとつては反対する理由としては十分らしい。それも彼の場合は無理もない。というか当然なのだろう。

「本当に大丈夫ですから。静雄さんは優しいですね」

これだけ静雄と話したのも初めてだ。つまり静雄にとつては帝人は『セルティの友人』で、接点はそれしかないのに、これだけ真剣に心配してくれる。

非常に性格が良い。この場合、比較対照にするのは臨也なのでなおさらかもしれない。

「本当に金欠で厳しいんです。でも借りたりとかはしたくないので」

「臨也相手に恋人ごっこするよりも、援助交際の方がまだ明るい未来が待ってるかもしれないよ？」

「それ、援助交際を推奨してまずよね新羅さん……」

それは大人としてどうなのだ。だが、それを推奨したくなるほど臨也は最悪だ、ということなのだろう。

「だって援助交際から始まる真実の恋は可能性が皆無じゃないけど、臨也相手じゃどう転んでも暗黒無双だよ」

どんな四字熟語だ。暗黒無双って何だ。そんなつっこみも、もはやできない。

それだけお先真つ暗、というようなニュアンスだけは伝わってくる。

「意志は変わらないみたいだねえ。これ以上言っても無駄みたいだ」

肩をすくめて新羅は息を吐く。仕方がない子どもだね、とても言いたげに。

「いいかい、帝人君。セルティを泣かせるような結末だけは全力回避してくれるかな。セルティは優しいから、君が不幸になれば絶対心配するんだ」

そして不幸になりすぎれば、その不幸な帝人を思っセルティが泣いてしまう、ということらしい。いったいどれだけ最悪な結末になればそうなるのか、と思いつつこくりと頷く。

そして頷きつつ、たぶん新羅は帝人が不幸になること自体は構わないのだろうな、とも思う。

帝人が不幸になることによって『セルティが心配する』ことが問題なのだ。彼の中で。徹底したセルティ主義の新羅らしい。